

本書には、二〇一一年三月の東日本震災を契機に日本の十五人の小説家が書いた十六の短篇作品が収録されている。

震災から一年が経過した、二〇一二年三月。「まだ一年」なのか「もう一年」なのか——あらゆるメディアが震災と原発事故とに触れぬ日はない。そのことについて口にしない日もなければ、まして心の中で考えぬ日はない。それほどに、あのととき起きたこと、損なわれた未来、あれから始まった「事後」は、日々を覆い続けている。

もちろん、そうした大文字の「出来事」だけが、私たちの生と時間を支配するわけではない。喪うほうがよいとすら思える別離や、暮らし育った場所の喪失以上と感じる光景や、放射性物質以上に洗い流せない汚辱を、ひととはときに感じもする。「次の一瞬に自分が生きている確証などないのだ」という認識は、多数の死を伴う出来事のしばしば感じさせる真実のひとつだ。だが、それだって、ラテン語の「死」に語源を持つ人間 = mortal という言葉のなかに、最初から書き込まれている。

他人からみればほんの些細な、ごく個人的なそれらの出来事（私たちひとりひとりの死もそこに含まれる）。それらを、他の大文字の出来事と比べることなく拾い記すことが、もとより文学

の役割のひとつだ。しかし、だからこそ、大文字の出来事にやすやすと向き合うことは、正しく躊躇と困難を伴いもする。また、どのように向き合ったところで、それが正解だったと確信できるはずもない。

そんななかで、ただひとつ確かなのは、私たちの想像力（たんに「小説の」という意味ではなく、科学技術や社会構想、さらにはごく個人的なそれもふくめた広い意味での）が、次のような役割を持つことである。それは、いまだ訪れぬ将来に備えるすべであり、すでに過去となつてしまったありえたかもしれない未来を悼む方法であり、その中間で吊られている現在を省みる手段なのだ。

海沿いのほとんどの建物が失われ、残った道路も家屋もまだやわらかな泥と水で埋まった東北の或る町。すっかり重くなつたスコップを手に、枕木ごと地盤が崩れ、車や家具や無数の生活用品が散らばつた、二週間前に人すら横切り流れたかもしれない線路を歩きながら考えていたのは、そんな想像力についてだった。正確に言えば自分たちの想像力と認識の限界についてだった。

幸福なこととも不幸なことも含め、私たちはあらゆることを想像できる（それを思考と呼んでももちろんよい）。そうすることが、未来とその可能性を拡張しもする。けれど、いかなる想像力も、細部とリアリティの点で、現実にあぶことは望めない。そのように強い現実を、可能なかぎり認識し、想像力のもとに送り返すのが、言葉の力だ。精神分析の語を用いるまでもなく、両者は補いあつて在る。

にもかかわらず、限度を超えて膨大かつ詳細な現実とは、そうしたサイクルをしばし凍らせる。想像力はみずからのいかにも空疎だったと思える無力感に襲われるし、言葉は認識できる速度を超えて増殖しつづける認識対象に追い越される。見渡す限りの泥土にスコップの先を差し込みみわづかなそれを掬いあげ、視線を戻してまるで風景の変わらぬことに途方に暮れるように、現実はその間に、崇高な虚無のように聳え立っていた。

そんな光景の前に、感傷でも逃避でもなく、ほとんど救済のような望ましきとして訪れたのは、もつとも信頼する書き手たちに——それも、同じように認識としての批評の言葉を用いる者たちではなく、想像力の象徴としてのフィクションの言葉の用い手たちに——、泥土を掘り起こすスコップのように言葉でその現実を掬い上げてほしい、ということだった。目の前の光景を、あるいは物語を、描いてほしいというのではない。間接的にはそのことがわずかな支援の手段になるかもしれないとしても、描かれた作品そのもので、読む者を勇気づけたり癒してほしいということでもない。音信のない肉親や知人を探して広大な土地を行き巡るひとたちの切実には届かないとしても、彼らがその地の荒涼に向きあうと同じく、スコップやシャベルとしての言葉を振るって想像力の荒れ地と対峙し現実を掘り崩してほしい——そんな願いだった。

本書に収められた作品（と、あわせて収めた数本のエッセイや評論そして対話）の書き手たちは、被災した土地を訪れて泥土を掬おうと声をかければ、躊躇なく同行してくれただろう。実際、最初はそんなふうを考えていたのだ。けれども、私たちの前に広がる荒涼は現実のそれと同じように、想像力と言葉にも訪れていた。そうは感じなかったひととも、もちろんいるだろう。ただ、

少なくともあの日のほくの前には、津波で見渡す限りの更地となった眼前の光景と、想像力と言葉のそれとが、まるで重なって見えたのだ。

その荒涼を掘り返すことは、目の前の泥土を掘り返すことに劣らず必要だった。結果として彼ら彼女たちは、「崇高な虚無」としての現実には、昨日までよりはるかに心細くも思えたかもしれない道具で——なにしろ、あの土地を訪れた一年後のいま、ようやくその記憶をここに記すことですら、躊躇と頼りなさに満ちずにはいないのだ——ひと掬いずつ挑むようにして、作品に向かったに違いない。

それぞれの作品が、それぞれの読み手にどう届くかは、もちろん読む者の決めるべきものだ。いかなる動機、いかなる困難があったとしても、それらが作品の価値を定めるものではない。だが、本書に収められた十六の短篇に限っては、作品それ自体の持つ意味や価値と同じように、書き手たちがいつ、どのように、どのような思いとともに手がけたかが意味を持つ。なぜならそれら全体が、あの日泥土に埋まった私たち読み手の想像力と言葉を、掘り起こすスコップとなるはずだからだ。